高橋隆雄先生を追悼する

浅井　篤, M.D., Ph.D.

1. 早過ぎる逝去

高橋隆雄先生が 2020 年 6 月 16 日にお亡くなりになったという知らせを、熊本の複数の知人から翌日 17 日に受け取った。数年前から体調を崩されていたようで心配していたが、71 歳での逝去の知らせは、やはり突然で早過ぎる。まさに諸行無常であり、今もそのショックが続いている。一昨年にあたる 2018 年 12 月 1 日・2 日の第 12 回国際熊本生命倫理円卓会議（International Kumamoto Bioethics Roundtable）でご一緒したのが最後の機会になってしまった。後悔先に立たずではあるが、もっとお会いする機会が作れば、もっとお話しする時間を確保すればよかったと今になって悔やまれる。

2. 国際生命倫理円卓会議

2014 年 4 月に宮城県の仙台市に移って以来、年に数回は来熊していたが、そのうちの一回は常に同円卓会議であった。必ず主催者の高橋先生とお会いし、高橋先生の興味深いプレゼンゼーションを拝聴し、同時に私に発表について貴重なコメントも頂いた。高橋先生は、円卓会議では全体の進行とセッションの座長を務められ、発表者に鋭く、かつフレンドリーにいつも本質的な質問を投げかけていた。懇親会でもいろいろな話題で話に花が咲いたのを思い出す。奥様とお会いする機会もあったと思う。国際熊本生命倫理円卓会議は私の研究活動の有難いペースメーカーでもあった。

3. 高橋先生との馴れ初め

2005 年 3 月、それまで 10 年住んでいた京都を離れ、熊本大学医学部で生命倫理学分野の初代責任者となった。それから丸 9 年を熊本で過ごした。熊本大学在籍が高橋先生とのご縁の始まりだった。高橋先生が所属する文学部は黒髪キャンパスにあり、私の勤務先の医学部は九品寺キャンパスにあった。2 つのキャンパスは数キロ離れているので、気楽に毎週のようにお会いしていたわけではないが、2007 年から 2018 年の間欠かさず開催された全 12 回の生命倫理ラウンドテーブルにはほぼ皆勤し、そのたびに高橋先生と生命倫理についてお話できた。他の研究会で交流する機会も年に数回はあったと思う。9 年間で何度か、大学人・研究者の在り方についてもご意見を聞かせていただいたことを思い出す。

４．稀有な本物の哲学者

私のように医療に関わる倫理にほぼ特化した狭い興味と医師という固定した視野からではなく、高橋先生はとても高い見地から広い視野を持って人間社会の倫理問題を捉えていらっしゃったと思う。正直言って、私には想像もつかない新しい観点と無数の変数を考慮にいれて、深い知識を駆使して哲学的思考を進めていると感じていた。「宇宙的」と表現してもいいかもしれない。超然とした態度というべきか。うまく表現できないが、目の前の問題に囚われていない自由さと飛躍のようなものがあった。そこが高橋先生を本物の哲学者たらしめ、多くの若い研究者を引き付けていた理由ではないかと思う。稀有な本物の学者だった。

5. 懐の深い編集者に思い出は尽きず

高橋先生には執筆活動でも大変お世話になった。高橋先生は編集者・企画者として、九州大学出版から生命倫理に関するシリーズ本を長年にわたって刊行された。そのうち 4 つの企画で、「日本の生命倫理・回顧と展望」「自己決定」「生命という価値」「医療の本質」のテーマの下、自由に論考を書かせていただき、いろいろ暖かく建設的なコメントをいただけた。非常に懐の広い編集者であった。他にも日本内科学会の研修プログラム作成にも参画いただき、日本生命倫理学会企画・丸善出版発行の『シリーズ生命倫理学　第 13 巻　臨床倫理』では、私の依頼に

応じて共同で責任編集にあたっていただいた。一冊の本を企画編集するのはとても大きな心理的時間的負担になるが、高橋先生との共同作業であり安心して取り組めた。心から信頼できる存在だった。

高橋先生の思い出は尽きないが、私にとって、これからもずっと「熊本大学黒髪キャンパス nearly equal 高橋隆雄先生」である。今後来熊してもお会いすることが叶わないと思うと、とても悲しく、人生の儚さと寂しさをひしひしと感じてしまう。

（あさい　あつし　東北大学大学院医学系研究科
医療倫理学分野教授）